

幼児の造形教育

——基本となる問題について——

林 健 造



○むなしさを感じるとき

だれでも、人はふと自分のしている仕事に何とむなしさがあるむなしさを感じることもあるものだ。

例えば、子どもに絵を描かせる仕事の中で。

あの子はだまっていたって、どんどん好きなように描いている。あの子はまた今日もお人形さんね。あの子はぐるぐるクレヨンでわけのわからない線ばかり。そしてあの子はきつと今日も「ボク描けないよ。先生描いてよ」というに違いない。

教師は、あっちこっちとび回って、どの子にも絵が描けるようにと一生懸命話し相手になったり、ヒントを与えたりして疲れきってしまう。そんなとき、がっくりと肩をおとしてやっばりあの子はだめね、と思ったり、絵を描いて何になるのだろうと、ふとむなししい風が胸中をふきぬける。

また例えば粘土あそびの仕事の中で……。準備から、後始末まで

汗びっしょりになりながら、粘土を指導する。

「だって子どもたちが大喜びなんだもの」というムードだけを支えである。誰か天井にまたぶっつけないかしら。誰かは、お水を入れすぎてビチャビチャにしてしまうかもしれない。うっかりしたら、また流し場がつまってしまうかもしれない。あの子は、体全体を使ってすごいわんをつくるというのに、あの子はまたおだんごばかりか。

指導が終えたとたんにまたがっくり、なんで粘土なんてしなきゃあならないんだろう。またぞろ、むなしさが襲ってくる。というのではないだろうか。

○造形する意味

だから幼児に造形教育をする意味を、何とかはつきり把えておきたいと思うのである。そうすれば、ともかくも自分がしている仕事にもっとはつきりした自覚が持てるはずなのである。

二千万年も昔、猿から進化した人間のことを考えてみよう。これも一つのアプローチである。

人間の先祖が木からおりて、二本足で立ったために手でいろいろのものをつくりだすことができるようになった。自分の食べ物をみつけてきたり、外敵から自分を守るために道具をつくった。そうすることによって脳が非常に発達してきて、ますます手でいろいろなものがつくれるようになった。

もちろん、はじめに言葉ありきと聖書にもあるように、人間はことばを生みだすことにより、意志の伝達ができるようになり、集団社会をつくりあげた。集団社会の中で互いに協力しあいながら、人間はますます進歩していった。

つまり人は、手でものを表現することで、まったく他の動物と違って、自然を支配する力をもったわけである。

○想像力という武器

しかし、ものをつくる動物は人間だけではない。よくいわれる言葉だが、くもは立派な織物師であり、はちはすばらしい建築家である。しかし、はちもくもも本能にまかせて、くり返し同じものをつくっているにすぎないし、そこには個性も、新しい工夫もみることではない。

ところが人間は、どこが違うかという点、つくる前にそれを考えることができる。つまり想像する力をもっているということである。

独創力・構想力・発想力などと呼ばれる一連の能力をもっているところが、全く他の動物と違う点であろう。

もし有史以前の赤ん坊を現代につれてきて育てたとしたら、その子は、われわれと少しも変わらない現代人としての知性をそなえた人間に成長するだろう。ところが、一匹の猿を移してきてもやっぱりそれは猿でしかないだろうし、せいぜい一輪車に乗ってタバコをふかす以上はのぞめないだろう。

神さまは、人間に、鋭い牙も、強靱な爪も何も与えてくれなかったかわりに、すばらしい脳を与えてくれたようで、時実利彦氏の話によれば、生まれたときの赤ん坊の脳の重さは370~400g、体重の10%、頭でっかで容易に他の動物のようにには立てないのである。生後の脳の発達は、身体他の部分よりめっぽうに早く、六ヵ月で生まれたときの重さの二倍になり、七、八歳では大人の重さの90%に達するというから、いかに小学校一、二年生までの教育が大事な場であるかということも想像できる。

ともあれ、人間はこの想像力によって巨大な恐竜にも氷河や地殻の大変動にも絶滅することなく生きのこり、永い年月をついやして、今日のすばらしい文化や文明をつくりだしてきた。

ところで子どもが粘土で動物をつくったりどんぶりをつくったりしていることは、実はこのことと深いかわりがあるのである。大昔に、人間が考えたと同じことを、子どもたちは粘土にいどみながら人間が歩んできた歴史をくりかえしながら、生活の知恵

を獲得しているのである。「人は一生の間に、人間の歴史を経験する」という言葉もあるが、われわれの祖先が何万年もずっと考えてきたようなことを、子どもたちは粘土なら粘土という遊びの中で、考えているのである。

われわれの祖先が生み育ててきた文化の基本的構造を自己に同化し、それを変容しつつ人間に成長させること」そのことに、子どもの絵や製作が、しっかりと結びついているのだと考えてくると、子どもが絵を描いている活動にしろ、粘土でお皿をつくっている子どもの活動にしろ、それはきわめて大きな意味と価値があることがわかる。

ただそのために、何より大切なことは、子どもがいつも受身であっては、創造的なものはのぞめない。したがって、いつも一つの型の中にとじこもっていたり、つねに受身である場合には、変容の目的は果たせない。

「私なら」とか「ボクはこうだな」という前向きな態度が育っていないと次の段階の創造的な発展は当然のぞめない。

○おどろきをもつ子

生き生きしている子どもとは、おどろきをもつ子である。りんごの中に種子があったとっては驚き、青虫をみつけては、すごいなあと呼ぶ。ものごとに感動する子どもは、好奇心でいっぱい、生き生きと生活しているから、新しいことを見つけだして驚くことができる。それも人に教えられたのではなく、自分自身目

で発見することが多い、いわゆる主体性のある驚きである。このような子どもはつねに前進しようとしているので新たなものをつくりだす力（創造力）が豊かでもある。

反対に、何にも興味を示さない、驚ろかない子を考えてみたら、われわれは、非常に不安な感じになるのは当然であろう。

「おいしい？、この洋服すてきでしょう。このおもちゃすこいよ！」

親が一生懸命かかって、かえってくる返事は、いつも気のない「ううん」だったらその親は心配で心配で仕方がないに違いない。もちろんここからは、新しいものをうみだす力も、何かを求めようという積極的な力ものぞむことはできない。

われわれは、子どもに絵を描かせるときなど、元氣よく、のびのび思ったように描きなさいね。などと励ましているのは、子どもたちが好奇心に満ち、みずみずしい感性をもって、いきいきと主体的に生活できるようになってほしいと願うからなのである。

○「あ表現」と「ん表現」

ところで指導に当たっては、指導のねらいが明確である必要があるというようなことはいうまでもないが、案外漠とした中で、どっちともとれそうな与え方をしている、評価だけは一つの結果だけをとりあげようとすることが多い。

例えば「今日は、粘土で好きなものをつくりましょう」というだし方をしているのに、できた結果は、象やわにをつくった子は

○、おだんごづくりは×というような勝手なこのみで評価しているなどはそうである。おだんごづくりだって、常に無気力の表われではない。中には大きい小さいの、いい形などと夢中になつてとりこんでいる子もいるのである。

造形表現には、大体二つの世界がある。その一つは、絵で代表されるような主観的な感動を率直に表現することで創造力を育てていく分野と、もう一つは製作で代表されるような、ある目的に適応するためにいくつかの条件の中で、思考をともないながら創造力をのばしていこうという分野とである。

このような二つの世界を、仮に神社の狛犬のように、あ、とん、という一対のものとし、あ、表現、ん、表現と名付けてみた。北原白秋の「歌は阿也」という言葉があるが、まさに絵も、あ、という感動の声である。先へのべた驚きをもつ子の、すごいなあというの、あ、である。

一方、表現の方は、うーん、どうしたらいいかな、こうしてああして、などと考えながら表現が深まっていく形になる。

ここでは、普通おもしろい材料がまずあって、これで何かつくれないかなという場合と、何かつくりたいものが先にある場合と、何かいい材料はないかなとか、どうつくるかなという場合とがある。幼児の生活をみると、このようなことは意外に多い。

板ぎれをみつつけてきて、「いいものつくっちゃお」としたり、「ころころと走らせたいんだよ」などとだだをこねたりしている

のはそれである。したがって、指導に当たっては、どっちをねらうのかをはっきりさせることがコツであるし、導入でもあ、表現・ん、表現では大分違ってくるはずである。

何でも好きなものをと与えれば、あ、もんも両方出てくることは当然で、むしろ個性的で生き生きとしていればいる程両者が表われてくることになろう。

さっきのどんぶりやおだんごづくりの子どもだって、むしろん、表現で創造的な活動をしていると見るべきであろう。

一般に造形指導は、常にあ、表現的方法で何でも片づけてしまおうというくせがある。

「のびのびと、大きく、思いきってだ、あ、とね」などとよくいうが、それ自体悪い言葉ではないが、どうしたら立つようにつくれるのかななどというん、表現などで静かに考えさせるような場面でもいさかまわずだ、あ、とでは成果はのぞめないし、ん、表現の格好だけで、中味はあ、表現にしかならないことになる。

○問題になっている問題

私はこの春、一つの展览会と一つの研究会にでかけて、大変心に感じたことがある。

展览会の方は、横浜のある幼稚園であるが、絵でも製作でも、明るく生き生きとしたすばらしい作品が多かったが、それらが、その園の生活と実にうまく結びついているのである。

例えば写真のように、みんな「なんきんまめ」をお庭にまい

て、それが芽をだし、花を咲かせ、やがて実になるという一貫された過程の中で、その折その時の感動が、絵となり、製作となり、詩^{うた}となっているのである。

①は、なんきん豆の花が咲いたとき、思わず口ずさんだ子どもの言葉が、たくまざる詩をうみだしたものでしょう。

「なんなんなんちゃん なんきんまめちゃん あめがふったら
おはながさいた はやくたべたい なんきんまめちゃん」

②は、「こうしてお豆うえたらね。はっぱでできたよ」と驚きと喜びいっぱいの子どもの語りかけが、きこえてくるような絵である。

近頃、幼児にも観察画をさせることが大分叫ばれてきている。

たしかに鶏でも兎でも、みて描いたのと、みないで描いたものとは、まるで感動が違う。かといって昔のバケツや弁当箱を描かせるような愚をくりかえすことは無意味であろう。

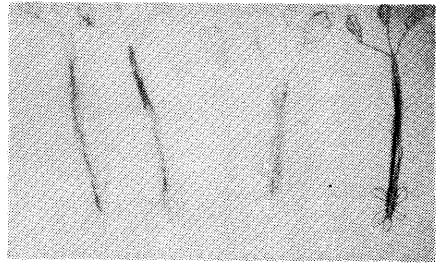
幼児の観察画とはまさにこのなんきんまめのような方向でなければならぬのである。

③ やがて収穫。この日をどんなにか子どもたちは待ちわびていたことか。生長の不思議さ、自分たちの手で

① なんきん豆の花が咲いた



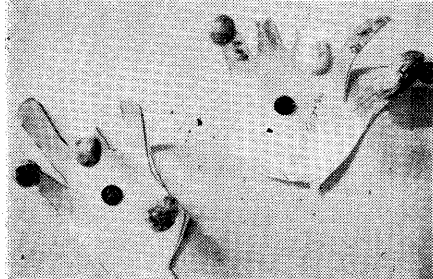
②



お豆が作れた喜びはまたどんなに大きい心の収穫でもあったろう。私たちにも覚えのある、豆のから指にきして遊ぶあれを、写真③のようにこのかわいい手型をつかってこんにちわをさせている。

こうありたいものである。絵も歌も製作も自然も総合されて、一つの幼児の成長の世界にすなおにとけこんでいる姿が見事であった。

③



また、幼児の絵を、母親がまったく同じように刺しゅうした作品もあった。幼児の絵を母親に理解させるのに一番いい方法であったとその園の先生は話してくれた。

次は研究会である。

ここでは、経験の豊かなすぐく熱心な先生の発表をきくことができた。

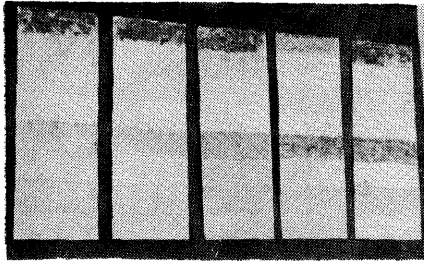
どちらかというと、子どもの

造形は、いつも好きなものをただけでは、ある数人の子だけのための造形指導に終わってしまうので、みんなのものにするために、みんなが描けるようになるためには、もととなる手だてをしつかり教えなければならぬという立場を強くとっていた。それはそれでたしかに今日の造形指導のあまさをしていた。

実際のもを觀察させている絵でも、お話の絵でも、幼児にふさわしい配慮を通した、あたたかい指導が感ぜられた。

しかし、基礎練習とでもいうのがあって、水絵の具をうすく塗ったり、濃くぬったり、線の練習をしたりしているのがあった。

(写真④) まずそのことをしつかりはじめに指導することが必要であるというのである。また木の葉の觀察なども、まずタテヨコの比率の大まかな見当をつけさせてから葉脈までもたんねんに描かせた絵もあった。

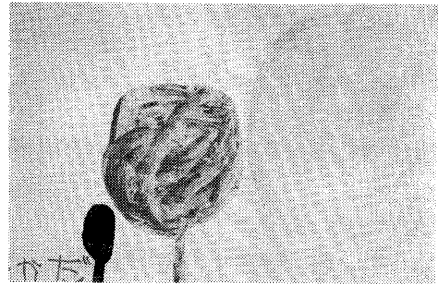


④

ここまでくるとさすがにはなと考えさせられるものがあつた。中学校の「色や形の基礎練習」とちようど同じことをしているのである。

しかし子どもたちはとても興味を持ってやっていたという。興味をもったからといって何をやって

⑤



もいいというものではあるまい。

ただ同じような発表でも、写真⑤のように、ゴム風船をふくらまして、ずんずん色が淡くなるというところを取りあげたものがあつた。それが内容的には、色の濃い淡いの基礎練習になっているにもかかわらず、子どもたちには驚きや変化のおもしろさなどを素直に感じとらせながら、基礎的な手だてがごく自然な結びつきとなっている点、アイデアとしてすばらしいと思つた。

幼児に与える造形の手だてというものは、むきだししの冷たいものであるよりは、こんなあたたかな手だてでありたいものである。(十文字学園短大)

— 新 刊 —

「幼児の教育—原理と研究」

津守 真・木原溥子編

本誌・第53巻(昭和29年)より第64巻(40年)にいたる約十年間に掲載された論説を選択、編集した書物。フレール館 定価六五〇円